命みつめて

「がんになった」夫の告白

第一部　自宅で看取る　上

「お父さん、今日も一日無事すごせるように見守って下さい」

仙台市太白区の看護師石上節子さん(61)は毎朝、夫孝雄さんの遺影に語りかけて出勤する。肝臓がんの夫を自宅で看取って3度目の春。その夫が愛情を注いだ庭には、今年も見事に紅白の梅が咲いた。見慣れた情景にいつもの日常。孝雄さんの姿だけがない。

「でも不思議と喪失感はありません。いつもそばにいるような気がします。生きていた時より絆が強くなったみたい」と節子さんは笑う。

会社員だった孝雄さんに肝臓がんが見つかったのは、2003年1月頃。55歳だった。C型肝炎から肝硬変に進行し、定期的な治療や検査を受けていた。

夜、ベッドに入って明かりを消してからポツリと言われた。「がんになった」。看護師という仕事柄、C型肝炎という病気の性質は、よく分かっていた。だが「うん」と答えるのが精いっぱいだった。

「多分、私の顔を見ながらでは、がんと言えなかったのでしょう。私も『いつか来る日』と思っていても、いざとなると返す言葉が見つかりませんでした」

30年余りも連れ添ったおしどり夫婦。寡黙で言葉に出さないが、心根の優しい人だったという。結婚記念日や妻の誕生日を絶対に忘れなかった。2人の男の子は就職し手を離れた。「老後は全国の温泉を巡ろう」と話していた矢先のがん宣告だった。

孝雄さんは「自分の楽しみに時間をつかいたい」と、同年末に会社を退職。ラジオ波でがんを焼く治療を続けながら、趣味の競技用自転車で遠出し、風のささやきや潮騒、土や緑の香りを楽しんだ。

「一人になることで、自分の病気と向き合っていたのかもしれません。家族の前で弱音を吐くことはありませんでした」

そんな我慢強い夫は、いつも漏らしていた。

「長生きできるなら、どんなに苦しい治療も頑張る。でも治らないなら、入院せずに自宅で過ごしたい」

肝臓がんは、再発を繰り返した。05年8月にはラジオ波治療も難しくなり、主治医から「余命1年」と告げられた。医療的には、あとは痛みなどを抑える緩和ケアが主体となる。

節子さんは当時、東北大病院緩和ケアセンターの看護師長だった。大勢の末期がん患者をケアする中で、家族と気持ちがすれ違ったまま亡くなる寂しいケースを少なからず見てきた。

「病院は人生の最期を迎える場所に、本当にふさわしいのだろうか。自宅なら家族が『おはよう』や『ただいま』を毎日言えるのに」

日ごろから漠然と感じていたそんな思いが、夫の希望通り、自宅で看取るという決断を後押しした。

（全3回、つづく）

◇

人は病で死期を悟った時、何を思うのだろうか。去りゆく姿は、家族や周囲に何を残すのだろうか。終末期医療を巡る物語をつづっていきます。

孝雄さんが乗っていた自転車のほこりを払う節子さん。夫の大切な思い出がつまっている（池谷美帆撮影）